—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

# 万葉の川心　第2回

業務部　舩田　園子

## 久慈川は幸くあり待て潮船に　真楫繁貫きわは帰り来む

右の一首は、久慈郡の丸子部佐壮（巻第二〇　「防人の歌」　四三六八番歌）

今この文章を拾い始めたあなたは「原風景」をお持ちだろうか。それは必ずしも思い出の場所や、そこで何かが起こったという劇的なシーンでなくてよい。いつもは特別気にかけていないのに、何かあるとそこを訪ねたくなったり、目を閉じて心に浮かべてみたりする。そうしてほっとする。「原風景」は、その人の中にいつのまにか入り込み、いつのまにか…その風景を愛している。

この歌の作者は、常陸から筑紫へと、国土の前線・辺境を守る防人の任務を果たすために旅立った。家族を残し、はじめて見る山河を遠く旅しながら、難波津でこの歌を詠んだと考えられている。ここは、陸の旅を終え、残り半分の道程を潮船に乗って向かう、故郷との第二の別れの場所である。いま作者の心に浮かんできたのは、見慣れた川の風景だった。遠く隔たった故郷の川が懐かしく、ありがたく、また恋しく思われて、その心情を歌に詠んだ。「久慈川よ、豊かに流れ、恵みと繁栄とを与えて待っていてくれ。潮船にたくさんの櫓を付けて、私は急いで帰って来よう。」

この歌には以前に作られた類歌がある。「白崎は幸く在り待て大船に真楫繁貫きまたかへり見む」（巻第九　一六六八）。潮船としたのは、いつも乗っている河船とは比べようもなく大きく、速さもはやい船を見て、この船で急いで帰りたいという思いである。「見む」を「来む」としたのは、すでに心は故郷の川にいて、そこに私が帰って来るのだという、見る以上の強い望郷の念が訴えられている。また、「そこで待ち続けなさい」ということで久慈川を人称化し、あたかも友や恋人に呼びかけるような慈しみの心も感じられる。類歌といえども、前の歌を越えた作者の心が選者大伴家持をうなずかせた。そして現在に至っても私たちの共感を呼ぶ一首となっている。

「原風景」——皆さんの心には、今どんな景色が浮かんでいるのだろうか。そしてどのくらい、その景色を愛しているだろうか。

久慈川が水戸から常陸太田を経て棚倉に通ずる国道349号にぶつかるところに架けられている橋は、この歌の「幸くありまて」を取って、「幸久橋」と命名されている。また幸久橋のたもとには、高い歌碑（写真中央の細長い石柱）が立てられている。この作者の原風景が、現在の久慈川のどの辺かは定かではないが、故郷がさいわいにあれと祈る気持ちは今も昔もひとつである。